

田辺聖子「姥やかり花の旅笠」小田実子の「東路日記」

集英社 三〇・一六刊

それは、こんな会話からはじまったであろうか。
 「お子さん、お伊勢詣りに行きますつしやうや、拍子もない話のごとありますが、ほんなこ
 て、旅は足腰たつうち。気の合う同士の旅や、よござすばい。来春あたりに……」
 そういうのは、五十歳の主婦、桑原久子。つやつやした顔に、口もとにほれる笑み、
 小太りでおちついた物腰、寛裕な商家のお内儀さんの、威厳と寛裕があるが、同時に、表
 情にはのびやかな、やわらかい色があつて、普通のお内儀さんにはみえない。
 「え、どて行かつしやうと？」
 と耳を疑うのは小田実子。こちらは五十二歳、同じように商家の主婦だが、首すじすつ
 ざりと色白の、若いときから小町娘といわれて村の盆踊り歌にまで歌われたという、つや
 やかな風情は失せていない。麗人は目尻の皺まで趣きありげにみえる。

「お伊勢詣りですたい。貴方は前にも一度、東の旅へ行かつしやうたが、あたいはまだこ
 の年ではじめてで、ほかに一人二人、「ウチも加てて」ち、いいなさる女がおらつしや
 ります」
 「昔の旅はもう遠々しい二十年前のこと、まあ、女はつかりの旅、そりゃよござすなし。
 あたしも加ててやんなつせ」
 「あゝあがござるなあ、たいそう楽しゅうござつしやう」
 ふたりは微笑しあう。それは天保十一年（一八四〇）のことだったからか。

久子さんは寡婦だからいが、実子さんの方は夫がいる。乞食ばちろん許すであらう
 寛裕でやさしい夫であるけれど、まずは早いこと、夫の耳に入れなければ。
 実子さんはたちまち心をきうきと離れてしまふ。

北九州は筑前、上戸井野村（現・福岡県中間市）は、九州の幹線道路というべき長崎街
 道に合流する「中筋往還」にある。長崎街道は九州大名の参勤交代の道でもあり、オラン
 ダ商館長も長崎参行も通った。伊能忠敬が、大田南畝が往還した。

中筋往還の中間の要所である上戸井野村には代官所もあれば郡屋（郡役人の詰所）もあつ
 た。

またここには藩主黒田侯の別宅（御茶屋）もあつた（長い歴史のうちには途中、廃され
 たり再建されたりという消長はあつたが）。あたりの山容が美しく露荷に好ましい遊郭の
 地だった。大体が農村ではあるものの、上戸井野村の道筋には商家が立ち並び、戸畑・
 若松・黒崎からの往来、交易が賑わしい。その一角に、豪商（小松屋）（西管商）がある。

実子さんはその家付き娘である。

実子さんも入讀している筑前歌人たちの歌集、「國縣集」にある作者署名によれば、
 「家ノ生業ハ商、頗ル極有リ」（原典漢文）
 と。

そうでなければとてものに、伊勢参詣の旅（しかも実子さんらは善光寺・日光まで
 足るのばしている）は実現できないだろう。

実子さんはこの旅を「東路日記」という紀行文に完成させ、久子さんは「東路日記
 記」としてまとめた。同行の女性二人が二人とも旅日記をものし、しかもそれが現存して
 るというのは稀有なことだが、そのどちらも品よく、挿入された歌も閑雅でぴったりし
 ている。歌はやや実子さんに才気があるかと思えるが、しかし実力は相伯仲する、とい
 うところだろう。

二人は当時、筑前地方の歌壇をリードした、国學者であり、歌人の、伊藤常足の門人な
 のである。

境遇もやや似ている。実子さんは養子子の夫清七を支えて家業にいそしみ、「家益富
 ム」とある。内助の功があつたのであろう。実子さんが十八歳のとき弟清七郎が生れたの
 で、弟の成人後、家を譲り、すぐ横に新家を建ててそこへ引越した。醬油醸造業を始めた
 という。こちらの屋号も「小松屋」だった（これが幕府にいう「二家ヲ為ス」であらう
 か）。

姉弟仲もよく共に家業に精を出したらしい。神社仏閣への参進も、必ず義兄の「清七
 且」と「清七郎義広」の名が並べて刻まれている、と「小田家一族の系譜」にはある。

片や、久子さんはこれも片屋の豪商（米屋）（豊・両管商）の女あるじだった。悠々た
 る遠賀川は南から北へ流れて豊前湾に注ぐが、片屋はその河口の町である。片屋千軒と謳
 われ、遠賀川を挟んだ東の山麓とともに、数軒をきわめた商業の町だった。舟運の便を利
 して物資も情報も輻輳し、財は文化を運ぶ。商人たちの間に孝悌の素養が蓄積してゆく
 は当然だろう。



※天正（一八四〇）年十一月十六日
 （項江の庵で三人）遠賀郡
 底井野（現・中間市底井野）
 の両管商「小松屋」のおかみ
 さん小田実子は、友人の
 「米屋」のおかみさん桑原久子
 に誘われ、伊勢詣りの旅に出発。
 旅は伊勢と越前を参詣し、
 日光、江戸と巡る。4日、八百屋
 （三三〇キロ）の長旅に。

風師山のいただきを、強い風のわたっているのが、海鳴りのように聞える。二百十日が近づいた、その前ぶれかも知れない。建くで、風の合間を縫って、汽笛が鳴る。

橋下の貯炭場を、すぐ前に望む、浜尾組の事務所、あかぬかと、灯がともっている。奥座敷に、大勢の人がけがうどき、なお、若くぞくと、集まって来る。やがて、七八十人になった。女が二十人ほどまじっている。

黒ガキの袴姿を背に、一人の巨漢が、入って来る人間をしらべながら、名鑑らしい大きな帳面に、赤インキで、しるしをつけている。六尺をこえるかと思われる、色の黒い、出歯で、顔のせまい、いがり顔の四十男だ。キルのシャツのうしろに、「浜尾組助役」と染めぬかれた半纏を着ている。眼が、するどい。

「どうやら、揃うたようにあるなあ。三人ほど来んが、半バ者はかりだから、もうこれでよからう。……新公、お前、親分へ——揃いましたから、お出まし下さい。……って、取りついで来い」

明治三十五年、秋、初
谷口マン、十九歳
明治三十六年、初夏
玉井金五郎、三十四歳
と、いふ故郷を追われ、
北九歩に流れてきた。

練一貫、刀と頼むのは、自分たちの身体だけじゃない。金があれば、とくに支那大陸か、ブラジルかに旅している。でなければ、なにか、商売でもはじめているかも知れない。また、半間があれば、ちがった道の歩きようもある。無事で、無銭、ということになれば、資本は、ただ若く力の盛れた肉体一つ、そして、労働が生活の方便となるほかはなかった。金五郎夫婦は、その身体を、粉にして、働いたのである。

「なんでも屋」が、「まあ、行ってごらん」といって、紹介状を書いてくれた。戸畑の永田組で、どうやら、二年間、落ちついたのだった。

二千トンの高野山丸の船橋を、初秋の風が吹き流れる。昼休みの弁当を食え終った仲仕たちの多くは、甲板や静などに横になって、昼寝をしている。(略)

金五郎は、デッキにもたれて、港内を見わたした。

洞海湾の風景は、開門海峡とは、また、趣を異にしている。

鳳凰形の巨大な入海は、戸畑、八幡、若松、という三つの町に取りかまされ、中島、瀬島という二つの島を浮かべている。小倉の正立山、八幡の帆倉山、若松の高松山などの山々が、この湾を包んで、八幡製鉄所をはじめとする大小工場の煙突が林立し、煙塵が空を覆っている。港の中の多くの船舶、沿岸を走る汽車——そういうすべてのものの底から、湧きあがって来る力動的な騒音。

(一)この港は、生きている

金五郎は、洞海湾の機軸とした鼓動が、じかに、自分の心臓にふれて来る思いで、この風景に、不思議な魅力を感じた。

しかし、視線が、若松の方に移ると、金五郎の顔が、しかめ面になる。

(若松はうるさいところじゃ。吉田鐵吉親分をはじめ、江崎潤吉、友田喜雄、ドテラ婆さん、などという暴力団が、たくさんいる。若松は、行くところでも、住むところでもない)

金五郎は、若松を敬遠する気持ちが強かった。

この年、第一次世界大戦、勃発。

玉井家は、正保寺町に移転していた。前の新件町とは裏腹で、一町とは離れていない。新築したのである。長男の勝則の外はみなこの家で生まれた。

家庭は、菊の好きなマンが花畑にしてみ、家の中には、相かわらず、猫がうようよとしていた。そして、柳葉菊の抽斗は、三段ほど、助広の鑢刀をはじめとして、日本刀で埋められていた。

「お父さん」もう、あなた、と呼ばず、マンはそう呼ぶようになっていた。「これまでも大変じゃったけど、これからが、一層、大変よ」

「おれも、そう思うところ」

大正三年四月一日、若松に、市制が布かれた。ときに、戸数六二五八、人口三七三九三。因みに、若松村が若松町になったのは、明治二十四年三月一日、戸数八八一、人口三三三二。明治五年には若松村は戸数一一〇、人口五八〇の一漁村にすぎなかった。

市制施行祝典が盛大に催された。

玉井金五郎、三十五歳。

同マン、三十一歳。

同勝則、九歳。

大野草平の文庫「花と龍」

林美奈子 放浪記 第一部 放浪記以前

私は北九州の或る小学校で、こんな歌を習った事があった。

※初出「九州出版放浪記」

改定 一九二九・一〇

更けゆく秋の夜 旅の空の
侘しき思いに 一人なやむ
恋いしや古里 なつかし父母

私は宿命的に放浪者である。私は古里を持たない。父は四國の伊予の人間で、太物の行商人であつた。母は、九州の檳島の温泉宿の娘である。母は他國者と一藩になつたといふので、鹿児島を遊放されて父と落ちつき場所を求めたところは、山口県の下関といふ處であつた。私が生れたのはその下関の町である。——故郷に入れられなかつた両親を持つ私は、したがって旅が古里であつた。それ故、宿命的に旅人である私は、この恋いしや古里の歌を、随分怪しい氣持ちで習つたものであつた。——八つの時、私の幼い人生にも、暴風が吹きつけてきたのだ。若松で、呉服物の曬乾をして、かなりの財産をつくつていた父は、長崎の沖の天草から逃げて来た浜という業者を家に入れていた。雪の降る旧正月を最後として、私の母は、八つの子を連れて父の家を出てしまつたのだ。若松というところは、渡し船に乗りなれば行けないところだと覚えてゐる。

今の私の父は養父である。このひとは岡山の人間で、実直過ぎるほどの小心さと、アノノマルな山ツ氣とで、人生の半分は苦勞で埋れてゐた人だ。私は母の連れ子になつて、この父と一緒にになると、ほんとに住家といふものを持たないで暮して来た。どこへ行つても木賃宿ばかりの生活だつた。「お父つあんは、家を好かんといふや、道具が好かんといふや……」母は私にいつもこんなことをいってゐた。そこで、人生いたるところ木賃宿ばかりの思ひ出を持つて、私は美しい山河も知らないで、養父と母に連れられて、九州一円を賑々と行商をしてまわつてゐたのである。私がはじめて小学校へはいつたのは長崎であつた。ぶつこく、雇といふ木賃宿から、その頃流行のモスリンの改良服といふのをきせられて、南近隣の小学校へ通つて行つた。それを振り出しにして、佐世保、久留米、下関、門司、戸畑、折尾と香つた順に、四年の間に、七度も学校をかわつて、私には親しい友達が一人も出来なかつた。

「お父つあん、俺アもう、学校へ行きたうなカバイ……」

せつぱつまつた思ひで、私は小学校をやめてしまつたのだ。私は学校へ行くのが厭になつてゐたのだ。それはちやうど、直方の炭坑町に住んでゐた私の十二の時であつたらう。

十一月の雨のかかる時であつた。

黒崎からの舟り道、父と母と私は、大声で話しながら、暗い荷車を引いて、暗い遊覧川の堤防を歩いていた。

「お母さん、お前も車へ乗れや、まだまだ遠いけに、歩くのはしんどいぞ……」

母と私は、荷車の上に乗つたかゝると、父は元氣のいい声で唄いながら私たちを引いて歩いた。

秋になると、星が幾つも流れて行く。もうじき街の入口である。後の方から、「おっさんよっ」と呼ぶ声がした。渡り歩きの旅夫が唄んでゐるらしかつた。父は荷車を止めて「何ぞ」と呼応した。二人の唄夫が遠いながらついて来た。二日も食わないのだといふ。逃げて来たのかと父が聞いてゐた。二人共鮮人であつた。折尾まで行くのだから、金を貸してくれと何度も頭を下げた。父は沈黙して五十銭銀貨を二枚出すと、一人ずつに握らせてやつた。堤の上を冷たい風が吹いて行く。茫々とした二人の鮮人の頭の上に星が光つていて、妙にガクガク私たちは嚇えてゐたが、二人共一円もちうと、私たちの車の後を押して長い事沈黙して町までついて来た。

このころの思ひ出は一生忘れることは出来ないのだ。私には、商業はちよつとも苦痛ではなかつた。

間もなく、呼びに帰つて来た養父と一緒に、私たち三人は、直方を引きあげて、折尾行きに汽車に乗つた。毎日の道を歩いたのだ。汽車が遊覧川の鉄橋を越すと、堤にそつた白い路が暮れそめていて、私の目に悲しくうつるのであつた。白帆が一ツ川上へ登つてゐる、なつかしい景色である。汽車の中では、金鎖や、指輪や、肌着、線本などを売る商人が、長い事しゃべつてゐた。父は赤い帽子玉のはいつた指輪を私に買つてくれたりした。

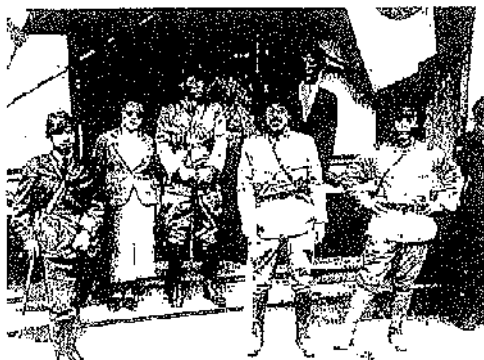
林美奈子

一九〇三(明治三六)年三月一日生



美奈子(3歳)と養父・密田大郎

一九二四(大正一三)年頃
(一九二六(大正一五)年頃)



ハルコ(美奈子)の一人として 左から2人目美奈子 右から火野葦平、スズキ正雄



長久島取材時、門司の井上宅にて 1950(昭和25)年4月
左より井上貞子、貞子、美奈子、佳子、楊内理助

「爺さんこれが『勇み駒』とお前が言っていたものか」

「そうだと、これが小倉の本当の祇園太鼓だ」と感慨深げに言った。群衆は「これが本当の祇園太鼓だ」と口々に囁き合った。

松五郎はもう浴衣の面肌をぬいで腰に巻きつけて夢中に太鼓を打った。四十七歳とはいえ、引き締まった肉付きの良い上半身は、午後から飲んだビールのせい、汗がびっしょり吹き出し、まるで水でもかぶったように濡れていた。

それが提灯の灯に艶やかに映って、豪快な美態を一段とそそった。

昔から小倉に伝わった「流れ打ち」「勇み駒」それから「暴れ打ち」の太鼓の打法は、複雑微妙なものと、時勢がこんな面倒な打法を、次の時代の青年に教えるような悠長な時代でなかったもので、自然に消滅して丁度いい。その頃、詳しく言えば大正六年頃、この打法を知っていると云えば、田町の横屋の隠居ぐらいのものであった。しかしこの隠居も永年喘息を患っていたので、ついに昔から伝わった祇園の打法は、単なる老人の語り草として知られていくがらだった。

すでに「勇み駒」から「暴れ打ち」に移った松五郎は、暴れ打ちの名の如く目まぐるしく踊り狂って太鼓を打った。それは太鼓から二、三步も離れた所で両腕を空に振り回し、腰と握が宙でカチカチと火の出るように激しく打ち合ったと思う瞬間、目にも止まらぬ敏捷さで太鼓を打った。ちよつと見ると、太鼓が独りでにドンドコドンドコ鳴って、それにつれて松五郎が踊っているようでもあった。

松五郎がこうして「流れ打ち」や「暴れ打ち」の妙技に夢中になっている姿を、彼の住んでいる古船場の人達が見た時、平常はやりして気の抜けたような松五郎が全く別人のように旺盛な精力を傾けつくして、奔放に踊り狂るのを見てただ驚くばかりだった。そして、今から二十年も前は「無法松」の仇名をとって、小倉の遊侠の徒や自由労働者の暴れ者に恒して、親分も子分ももたずに、ただ一人で暴れ回ったという松五郎の語が、決して嘘言でないことを覚った。

またある者は、この古風な太鼓の打法を、いつどこで誰から松五郎が習得したかを疑った。しかしこの疑問は、松五郎以外には永久に知られなかったのである。

山車が魚町から馬借町付近に来た頃、松五郎は水を浴びたように、びっしょり濡れた顔を平手で撫で、大きな息をついて腰を八百屋町の青年に渡した。誰かが冷酒をついだ大きな湯呑を松五郎に差し出した。グツと一息に飲み干した松五郎は、彼の妙技に酔ったように見入っていた先生に、会釈をして浴衣の袖に手を通した。

小倉市民はこの時以後、永久に「流れ打ち」「勇み駒」「暴れ打ち」の祇園太鼓の打法を見ることは出来なかった。

松五郎が死ぬる一年ほど前、未だ寒の降る肌寒い三月の宵、突然、酒気を帯びた松五郎が吉岡夫人の宅を訪ねたことがあった。

夫人は淋しい夕飯を終わって茶碗を洗っている、のっそり松五郎が勝手口からやって来た。平常なら、勝手口で立ち話をするのであったが、夫人が何気なしに「松さん座敷にお上がり」と言うと、松五郎は不思議に遠慮なく座敷に上がった。そして、何か改まった風にきちんと座った。夫人は何か重大な用件かと思つて松五郎の正面に座ると、松五郎はブンブン酒臭い息を吐いて「奥さん」と洗滌な声で言った。夫人は「何か松さん用事でも」と言いかけて松五郎の顔を眺めた時、彼の顔にかつて見たことのない逼迫した情熱を感じた。松五郎は急にがっくり顔を伏せて、しばらくは顔をあげなかった。畳にボタボタ涙が落ちた。夫人は「一体、松さんどうしたんです」と尋ねると、松五郎は涙に濡れた顔をあげて、夫人の顔を凝視した。「奥さん、俺は淋しいてつらい。奥さん俺は……」と言いかけて、突然、松五郎の退しい掌が夫人の華奢な手をがっしり犯んだ。

夫人はわずかに戦慄したのみで、激しい男の情熱に圧倒されて、化石のように凝固した。夫人の手を掴んだ松五郎は、直ぐに「奥さん、すまん」と叫ぶと、身を翻して飛び出した。一風のように、下駄を履かずに闇に消えた。

夫人は大きな空虚感と恐怖に襲われて、サメザメと泣き伏したのであった。このこと以来、松五郎は永遠に吉岡家に訪れることはなかった。

地九市市之文屋館之蔵より



①河川ハラルド撮影「無法松の一生」(1966)(公開時は大映)
三橋達也監督 三橋達也・三橋達也・三橋達也



②東映「無法松の一生」(1963)
北山阿弥監督 三橋達也・三橋達也・三橋達也



③東映「無法松の一生」(1968)
三橋達也監督 三橋達也・三橋達也・三橋達也



④河川ハラルド撮影「無法松の一生」(1948)(公開時は大映)
三橋達也監督 三橋達也・三橋達也・三橋達也

「大正八年五月七日、
孤獨の富田松五郎は
四十八歳で死んだ。世に
なす後進の唱歌に守ら
れて。」

松本清張

社会派推理小説

動機を主張することが、そのまま人間描写に通じるように私は思う。犯罪動機は人間がぎりぎりの状態に置かれた時の心理から発するからだ。それから、在来のも動機が一律に個人的な利害関係、たとえば金銭上の争いとか、愛欲関係におかれているが、それもきわめて類型的なものばかりで、特異性がないのも不満である。私は、動機にさらに社会性が加わることを主張したい。そうすると、推理小説もずっと幅がでる、深みを加え、時には問題も提起できるのではなからうか。

『推理小説の読者』

(一)……物理的トリックを心理的な作機に置き替えること、特異な環境でなく、日常生活に設定を求めること、人物も特別な性格者でなく、われわれと同じような平凡人であること、描写も「背筋に氷を当てられたようなぞっとする恐怖」の類いではなく、誰でもが日常の生活から経験しそうな、また手懸しそうなサスペンスに求めた。これを守り取り早くいえば、探偵小説を「お化屋敷」の掛小屋からリアリズムの外に出したかったのである。

『日本の推理小説』

『語る「小倉日記」』

田上耕作という青年は、(体?)こそ不自由であつたが頭脳が(明?)明瞭で、地元の指導的文化人である白川慶一郎のもとに出入りし資料調査の手伝いなどをしていた。ある時、森鷗外(小倉時代)の小倉時代の日記が散逸したことを知り、失われた空白を、当時流行し始めた民俗学の調査方法で「資料群集」し追めていくことを思い立つ。

耕作は、鷗外調査に打ち込んだ。鷗外がフランス語を学んだベルトラン神父や朋友・玉水俊雄(たまみずしゅんご)の系譜人、鷗外に度々原稿を依頼していた元門司新聞支局長・麻生作男など、小倉時代の鷗外を知る人物に取材し、次第に明らかになってゆく事實にますます情熱を燃やした。調査資料が嵩を増す一方で、耕作の病状は悪化した。昭和二十五年の暮、鷗外が「冬の夕立」と評した空模様の日、ついに息をひきとった。東京で鷗外の「小倉日記」が発見されたのは翌年のことだった。

『菊枕』

三岡ぬいはお茶の水商女山の才媛で、夫圭助が画家として出世しないのに失望し、軽蔑を覚えている。趣味に俳句(はく)をはじめがめきめきと頭角を露わし、宮城野郎の主宰する「コスモス」の巻頭を度々飾るようになる。が、ぬいの句作は昭和八、九年を境に衰微し入選作も少なくなっていく。ぬいの梅堂素子は異常なほどで、彼が脳溢血にかかったとき、菊枕を作った自分(自分?)でわざわざ肩代りしたほどであつたが、入選が少なくなると家庭も眼中になくなるほど梅堂あての手紙を毎日のようにめんめんと書く。それが疎んぜられたのか、昭和十一年、

「コスモス」同人を除名される。その後も梅堂あての手紙は続き、二百数十通に達したという。十九年、ぬいは精神病院に入る。圭助が見舞いにいくと、あなたにと菊枕を差し出す。中はしぼんだ朝顔の花だった。圭助は狂って初めて自分の胸に帰ってきたのかと涙を流す。二十一年死去。

『点と線』

福岡市の香椎海岸で男女の死体が発見された。男はある汚職事件の渦中にあつた官庁の課長・佐々・佐山、女は料理屋「小雪」の女中・お時だった。現場の状況から誰もが「憎死」と判断した。

福岡署の鳥飼刑事は何かがひっかかっていた。食堂車の「御一人様」の伝票をきつかけに、特急(あさかぜ)には佐山しか乗っていないかつたのはと疑問を持つが、これには目撃者がいた。機械工真面を営む安田辰郎と「小雪」の女中たちは東京駅十三番ホームから、十五番線に停車中の(あさかぜ)に乗りこむ佐山とお時を見たというのである。

警視庁の三原警部補は汚職の捜査上、佐山の死に疑問を持っていた。鳥飼刑事と三原警部補は協力し事件の真相に迫る。お時(おとき)は……